

和泉を歩こう!
池田エリア



池田エリアは
こんなところ

池田エリアは、和泉山脈から流れる槇尾川(まきおがわ)によって形づくられた池田谷一帯で、南北に長い和泉市のちょうど真ん中あたりに位置しています。

泉北高速鉄道 和泉中央駅(1995年開業)周辺を中心に開発が進んでいる最中で、店舗・マンション・住宅が建ち並ぶ「現代的」で「都会的」なエリアである一方、田園風景や豊かな緑も残されています。

池田エリアは、古代のお寺や須恵器(すえき)の窯跡(かまあと)などが集中するなど古くから開けてきたところで、光明皇后(こうみょうこうごう)や俊乗坊重源(しゅんじょうぼうちゅうげん)に関する伝説もよく知られています。

② 浄福寺
じょうふくじ

国分町



浄福寺

槇尾川の岸边にある浄土宗(じょうどしゅう)のお寺です。「滝の寺」と呼ばれ、国分寺の奥の院(本堂の奥にある施設)であったともいわれています。

光明皇后が智海上人と鹿の子もとして生まれたという「光明皇后伝説」の舞台にもなっています。境内や槇尾川には、智海上人が修行したという洞窟(どうくつ)や、鹿の足あとが残る石など、伝説にちなんだスポットがあります。

なお、光明池の水はこの付近で槇尾川から取水されています。

① 国分寺
こくぶんじ

国分町

奈良時代の聖武天皇(しょうむてんのう)は、乱れた世の中を仏教の力によりしずめるため、各国に国分寺を建てるように命じました。

和泉国が成立したのは、国分寺建立(こんりゅう)の命令から16年後の天平宝字元(757)年のことだったので、はじめは和泉に国分寺はありませんでした。続日本後紀(しよくにほんこうき/平安時代の歴史書)によると、承和6(839)年に、和泉の地にもともとあった安楽寺というお寺を、和泉国分寺としたとされています。

国分寺周辺には、この地で修行していたお坊さん(智海上人/ちかいしょうにん)と鹿との間に女の子が生まれ、その子が後の光明皇后(こうみょうこうごう)であるという伝説が残っています。



発掘調査で見つかった国分寺の瓦

③ 光明池
こうみょういけ

室堂町・和田町



光明池

光明皇后伝説ゆかりの光明の滝(国分町)付近から取水し、和田・室堂の谷をせき止めて作った、大阪でもっとも貯水量の多い池です。

光明池という名前から、光明皇后の時代(奈良時代)に作られた古い池であるかのように思うかもしれませんが、実は農業用水の確保を目的に、昭和のはじめに作られた池です。

当時、日本の植民地であった朝鮮半島から、たくさんの労働者がやってきて、工事に関与しました。彼らは、厳しい労働と生活の日々を送り、工事の事故で亡くなる方もいました。本堤防のそばには、朝鮮人労働者の慰霊碑(いれいひ)が建てられています。

池田エリアマップ



和泉を歩こう! 池田エリア

和泉市の
歴史と文化財
マップ



槇尾川

光明皇后伝説が残る槇尾川の上流域の様子。ここから引かれた水が、和泉市域をうるおしています。

弥生時代の歴史が眠る街

和泉市の文化財ウェブサイト



日本語



英語
(English)



韓国語
(Korean)



中国語・簡体
(Simplified Chinese)



中国語・繁体
(Traditional Chinese)

ウェブサイトアドレス <https://izun.jp/>

発行：和泉市文化財活性化推進実行委員会
発行日：2019年3月31日

④ 契沖養寿庵跡 万町

けいちゅうようじゅあんあと

「国学の祖(こくがくのそ)」と呼ばれる契沖は、寛文9(1669)年から約10年間、和泉市域に滞在し、古い書物の研究に励みました。はじめは、久井村の辻森家に、延宝2(1674)年ころからは万町村の伏屋家に滞在して、両家が持っているたくさんの書物を読みました。

万町村の伏屋家では、当時の主人が契沖のために庵(いおり／小屋)を作り、契沖はそこで研究をおこないました。この庵が養寿庵です。契沖が和泉を去った後、大坂(大阪)のお寺に庵が移された(その後、大阪大空襲で焼けてしまった)ため、現在は、庵そのものは残っていませんが、跡地が大阪府の史跡に指定されています。

契沖の研究は、その後の世代にも受け継がれ、国学という学問に発展します。国学とは、外国から仏教や儒教がもたらされる以前の日本人のころを明らかにしようとする学問で、幕末の尊王攘夷運動(そのんうじょういうんどう)にも影響を与えました。

万町の養寿庵跡は個人の方のおうちにあるので公開はされていませんが、契沖が和泉の地で過ごし、国学の基礎を築いたことを記す石碑が、久井町内や石尾中学校前に建てられています



養寿庵跡の記念碑



石尾中学校前「国学発祥之地」碑

⑤ 目塚古墳/目塚之碑 東阪本町

さかんづかこふん/さかんづかのひ

江戸時代、万町村の伏屋氏が、今の東阪本町周辺を田んぼにするために開発していたとき、土の中から人の骨や古い刀が出てきました。当時、このあたりは



目塚の碑

「目(さかん)」と呼ばれていたことから、伏屋氏は「目(さかん)という古代の役職の人の古墳だろう」と考え、掘り起こしてしまった石室の石のひとつに文字を刻み、「目塚(さかんづか)之碑」を建てました。

また、目塚は、「めづか」とも呼ばれ、目の病気が治るようにお祈りするとよい場所として、江戸時代の観光ガイドブック『和泉名所図会(いずみめいしよずえ)』にも載っています。

発掘調査をしたところ、目塚古墳は直径17mほどの円墳(円形の古墳)で、6世紀末ごろのものだとわかりました。古墳が作られた時期からして、「目(さかん)」だった人のお墓とは考えにくく、このあたりの有力な一族だった坂本氏のお墓ではないかという意見が出ています。

⑥ 春日神社／三林古墳群 三林町

かすがじんじや／みばやしこふんぐん



三林古墳群

6世紀末から7世紀にかけて、横尾川右岸(東側)にはたくさんの古墳が作られ(和田、室堂、三林、黒石)、今でもそのようすを確認することができるものが残されています。

三林町の春日神社の森の中には、小さな土まんじゅうが残されています。これが、三林古墳群です。

かつては、100近い古墳があったようですが、今では20あまりの古墳が確認できるのみです。

古墳は周濠(しゅうごう／古墳の周りにめぐらされた堀)を共有しながら寄りそうようにして残されています。中には、石室の入口が開いているものもあり、中のようすを見ることができます。

⑦ 谷山池と梨本池

たにやまいけとなしもといけ

府中町・鍛冶屋町

谷山池は、和泉中央丘陵の南部で、納花町南方の山あいにあります。面積は6.3ha、貯水量14万tといわれる大きなため池です。

鎌倉時代に東大寺を再建し、各地の土木工事で活躍したお坊さんの俊乗坊重源(しゅんじょうぼうちゅうげん)によって開発されたという言い伝えがあり、池に隣接する和泉リサイクル環境公園には、「重源堂」という祠(ほこら)が建っています。しかし、この言い伝えは事実ではなく、重源が活躍した時期からはるか昔の9世紀から10世紀ごろに池が作られたのではないかと、という考えも示されています。

梨本池は、谷山池の西側に作られたため池で、面積は6.8ha、貯水量15万tです。松尾寺に伝わる古文書(こもんじょ)によると、鎌倉時代の承元年間(1207～11年)に、農業用水の確保のために作られたようです。梨本池が作られたことにより、横尾川左岸(現在の鍛冶屋町、浦田町、万町)の水田をうるおすことができるようになり、このあたりの開発が進められていきました。

また、谷山池・梨本池の周辺は須恵器(すえぎ)の生産地としても知られています。

和泉市域には、須恵器の窯跡(かまあと)が数多く確認



空から見た谷山池と梨本池

されており、池田谷の西・和泉中央丘陵(いずみちゅうおうきゅうりょう)にも生産地が広がっていました。特に、谷山池・梨本池のあたりには、8世紀のものと考えられる窯跡が多く見られます。

和泉中央丘陵で須恵器の生産がはじまったのは6世紀です。はじめのうちは、谷の入口に近いところ(現在の和泉中央駅のあたり)で須恵器が作られ、その後200年をかけて谷の奥へと移っていき、谷山池・梨本池のあたりにまで至りました。

須恵器を窯で焼くときの燃料として、窯のまわりで薪(まき)を確保する必要があるのですが、まわりの森林をひととおり伐採(ばっさい)してしまったら、次の場所を求めて谷の奥へと進出していったため、このあたりにまで達したのでしょう。

⑨ 切坂城址 国分町・下宮町

きりさかじょうあと

切坂城は、国分町と下宮町を分ける旧国分峠の東にあり、独立した山の頂(いただき)につくられた戦国時代の城です。

国分峠を池田谷から横山側へ越えた街道は、城の南側で二手に分かれ、一方は南河内(河内長野方面)へ、もう一方は紀伊(和歌山方面)へつながっており、切坂城は交通上の重要な地点に作られたといえます。

城があった場所は、後世に人の手が加わっており、当時のようすがはっきりと残っているわけではありませんが、主郭(しゅかく／本丸)にめぐらされた土塁(どるい／土手)や、城を守る兵が身を隠すための塹壕(ざんごう)と考えられる空堀(からぼり／溝)など、この山が城であったことをしめすものが残っています。



切坂城遠望

⑧ 羅漢寺の大日如来坐像 平井町

らかんじのだいにちによらいざそう

大日如来とは、仏教の世界において、宇宙の源(みなもと)で、万物を生み出した存在であるとされる仏さまです。

羅漢寺には、鎌倉時代に作られた、大日如来の見事な像が伝えられています。作者ははっきりとは分かっていませんが、慶派(けいは)といわれる仏師(仏像彫刻師)の一派の人物による制作であると考えられています。

慶派は、東大寺南大門の金剛力士像を制作した運慶(うんけい)・快慶(かいけい)をはじめ、有名な仏師を何人も生み出した一派です。高さ約60cmの立派な仏像で、2013(平成25)年に、和泉市の指定文化財になりました。



大日如来坐像(市指定文化財)

⑩ 和泉市いずみの国歴史館 いずみしいずみのくにれきしかん

桃山学院大学のとなりにある宮ノ上公園の中に、まなびのプラザという建物があります。その中にある資料館がいずみの国歴史館です。

岩宿(いわじゆく／旧石器)時代から現代まで、和泉の歴史を紹介しています。発掘調査で見つかったまが玉や土器、古いお寺の瓦、江戸時代の古文書や刀、和泉市が誕生したときの役所の資料などを展示して、人びとの暮らしをひも解きます。

また、和泉に関するさまざまなテーマで、特別展や企画展も開催しています。そのほかにも、講演会や体験教室などのイベントも行っています。

和泉市いずみの国歴史館

- 所在地 和泉市まなび野2-4
- お問合せ(電話・ファックス) 0725-53-0802
- 開館時間 午前10時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、
祝日の翌日(土日は開館)、
年末年始、展示入れ替え期間(不定期)
- 入館料 無料(特別展は有料の場合あり)



須恵器ってどんな土器?

日本列島では、縄文時代から「野焼き」というたき火のような方法で土器(縄文土器・弥生土器など)が焼かれていたんだ。でも、この方法は、比較的低い温度で焼くため、強度があまりなかったんだ。

5世紀になると、大陸との交流が盛んになって、朝鮮半島から日本列島に移り住む人びとが増えてきたんだ。この人びとを渡来人(とらいじん)というよ。彼らは朝



鮮半島の新しい技術を各地に伝えたんだけど、そのうちの一つが土器の作り方なんだ。

渡来人が伝えた土器の作り方は、ロクロを使って形を整え、窯の中で高温で焼き上げるというもので、この焼き方で作った土器が須恵器なんだよ。須恵器は、それまでの土器に比べてとっても硬く、水もれしにくいから、貯蔵用(ちよそうよう)の容器に向いているよ。

いずみの国歴史館では、いろんな須恵器が展示されているから、ぜひ見に来てね!こがねも待っているよ!

